

みられる「異物置き忘れ」が3例あった。いずれも1999年以降の報告である。大学病院での「患者取り違え事故」と都立病院での「点滴薬取り違え事故」発生が、医療安全についての社会的関心を高める契機となり、医療安全元年とも評されている1999年以降に、このような「うっかりミス」の範疇に含まれる歯科医療事故が発生していることは留意する点である。

7) 乃木希典大将の義歯と上顎石膏模型の100年後の出会い

Encounter of General Maresuke Noguchi's complete dentures and upper plaster model after 100 years

神奈川県歯科医師会 歯の博物館

○大野 肅英
羽坂 勇司
斉藤 眞旦
高橋 滋樹

Toshihide OHNO, Yuji HASAKA, Masakatsu SAITOH, Shigeki TAKAHASHI, Kanagawa Dental Association, Hanohakubutsukan

乃木希典は、嘉永2年生まれ。戊辰戦争後、長府から上京し、明治18年に陸軍少将に任じられ、歩兵第十一旅団長として熊本に赴任した。

明治19年、ドイツ留学1年後に帰国。明治22年に近衛歩兵第二旅団長に任命された。明治25年2月に休職し、那須野に9カ月滞在。明治28年に陸軍中将に昇進した。明治29年、台湾総督。同年、第十一師団長。明治34年休職を願い出て、那須野で約2年の農耕生活を送った。明治34年、日露戦争が始まり現役に復帰、第三軍の司令官に任ぜられ戦地に赴いた。出征後、陸軍大将に昇進し司令官として第三軍を指揮した。明治38年、旅順要塞を陥落し露将ステッセルと水師營で会見した。明治40年、学習院院長兼任。大正元年9月13日に明治天皇の大喪の日に殉死した。乃木大将は軍神と崇められたが、司馬遼太郎の著書『坂の上の雲』では無為無策というマイナスの評価もある。

今回のきっかけは、京都・伏見神社に保存されている乃木將軍の義歯の鑑定から始まった。乃木

將軍は若い時から歯が悪く、何人もの歯科医の治療を受けていた。乃木日記には、軍関係者との交流が主で個人に関する事柄は詳細には記されていない。しかし、乃木將軍の治療記録としては貴重で、これをベースに入手した資料を組み合わせ、抜歯や義歯について追跡した。

京都伏見・乃木神社に保存されている義歯は、乃木將軍が常に二組を用いており、その一組は妹の長谷川いねが寄贈したものである。義歯を鑑定した結果、明治中期に製作されたゴム床義歯（西洋義歯）で、使われていた人工陶歯は明治30年より国産化された宿沢陶歯であった。

乃木將軍の歯型は、長崎県歯科医師会に保存されており、ご好意により複製模型を製作した。この石膏模型は、乃木將軍が明治44年5月12日に受診した木谷茂吉歯科医が16個製作し、所縁のある人に配布したものであった。

調査の結果、東京乃木神社には同じ石膏模型の第三号が、東京池尻の自衛隊衛生部隊・彰古館には第十号が保存されていた。

京都伏見・乃木神社に保存されている乃木將軍の義歯と三箇所の石膏模型は、別々に保存され、互いにその存在が知らされていなかった。この義歯と歯型は100年有余を経過した出会いであった。抜歯の記録は乃木日記には記載がないが、松下芳男著「乃木希典」に、「むし歯のために、全部歯を抜いて総入れ歯になり、健康にさわって休職した」というエピソードが紹介されている。

今回、裏づけとして、明治24年8月25日付の子爵高嶋頼之助陸軍大臣宛に提出した「義歯出来後未だ附着完全致さず、実用の為適さず候間、来る31日より右先き二週間滞京之儀、御許可被下度別紙診断書相添、此段奉願候也」、明治24年8月25日付の石黒陸軍軍医修監の診断書「右は歯病にいり出京治療差加居候処、干今全治に至らず、尚此後凡二週間の治療を要し候、此段及診定候也」が見つかった。乃木將軍の休職は、抜歯、合わない義歯は表向きの理由であり、いろいろな資料により心と身体不調、鬱症状によるものと思われる。

乃木將軍は43歳頃抜歯し、下顎は何本か残存歯があり上下の義歯を装着している。乃木日記には、明治36年11月15日（55歳）に「臼歯をセメントにて填実す」とあり、下顎には何本か歯が残っていたようだ。

伏見・乃木神社に保存されていた義歯から、作成した歯型と明治44年の歯型を比較し、次のような事柄が判明した。乃木將軍の義歯は、顎堤に吸着不調という表現が乃木日記にあるが、明治44年の石膏模型には、上顎前歯部の顎堤に大きなフラビーガム（骨が吸収した部分へ軟組織の増殖）があり、義歯が安定せずに脱落しやすい原因と考えられる。

義歯の材質は、明治期に輸入されたアメリカ製のデンタルゴム（ゴム床義歯材料）で、人工歯はGCアサヒに保存されていた陶歯と照合し、明治30年より国産化された宿沢陶歯と判明した。

今回、乃木將軍の義歯と模型、東京池尻の自衛隊衛生部隊・彰古館より入手した資料より調査した結果について報告した。

8) ジョージ・ワシントンと曲亭馬琴の義歯の比較

COMPARATIVE STUDY of DENTURES,
George Washington and Kyokutei Bakin

東京都 新藤 恵久

Yoshihisa SHINDO, Tokyo

アメリカ初代大統領 George Washington (1732~1799) は若い頃から歯痛に悩まされていた。

彼の侍医 Games Grake は、彼の痛む歯をしばしば抜歯していたという。そのため、はじめて義歯を入れたのは、28歳の時からという。そこで、現在伝えられている数点のワシントンの顔には、義歯を入れる以前のものと、義歯を入れた顔との2種類があり、興味深い。前者には、フランスの彫刻家フードン作の肖像の顔は、25セントコインや切手に使われている。また、後者は義歯を入れた顔で、1796年に Gilbert Stuart が描いたワシントンの肖像画であり、1ドル紙幣に用いられている。

フードンの作は、ワシントンが53歳の時のもので、祖国の父と呼ばれた闘士としての彼の風貌を良く伝えている。後者は、ワシントン44歳の時、ニューヨークの歯科医 Issac Greenwood の作った上下義歯を入れた肖像画である。

この肖像画を描いた時の苦心談が伝えられている。この時、ワシントンの口の中に残っていたのは1本の下顎第一小臼歯のみであった。この時のワシントンの義歯は、上下の顎堤の間隔が少なく、そのために下唇が凹んでしまっていた。そこで口の自然観を回復させるために脱脂綿を唇の内側に入れて膨らませたという。ところが、このために慈悲深いお婆さんのような顔になってしまったという。

この時の義歯を作った Greenwood は、フランスで歯科技術を学んだという。この義技術歯は、上顎の口蓋部は、金の板を鋳型で圧印したもので、この床に金を厚く蝋着し、これに穴をあけて木のピンを立て、象牙製の歯形を取り付けたものである。下顎は一塊の象牙に歯形を彫っている。この上下顎床は、鋼鉄製のスプリングで維持されている。この不具合の義歯のため、彼は食事中不機嫌であったという。

また、この義歯を装着している間は、絶えず咬合圧で押さえていなければならないので、彼は人前では決してくしゃみをしなかったと伝えられている。くしゃみをすると義歯が飛び出してしまうからである。

19世紀まで、欧米では義歯は咀嚼の為の実用性は少なく、富裕層の装飾のようなものであった。義歯といっても動物の骨を彫刻したものに代わって18世紀に英国で象牙を用いたものが作られた。

1790年ころ陶製の義歯が考案され、前歯と共に床部分までつくられるようになった。こうして審美的には完成されたものの、全く実用的でない義歯が、どんなに不快でも口の中に留めて、苦心して食事をしていたという。

ビクトリア王朝時代、歯を失った貴婦人は、パーティに出かける時、先ず寝室で歯無しで食事を取り、パーティ席上では決して食物に手を出さなかったという。

一方、日本の義歯は、材質こそ異なるが、審美的にも実用面からも今日の義歯と変わらぬ世界最古の義歯は、1538年に78歳で往生した和歌山の願成寺の創立者の上顎総義歯である。

この事より、わが国の義歯の創造は、すくなくとも16世紀には完成していたと考えられ、その背景には平安時代に完成された木彫の技術の継承によるものと考えられる。